遞局認可

時事新報

通三丁目十一番地
慶應義塾出版社

東京　明治十七年四月十日　木曜日　第六百二十九號　日曜日休刊　定價金三錢

公報

○東京府告示乙第六十號
秋田縣由利郡金浦村字港島ヘ人民自費ヲ以テ燈臺建築候ニ付費用償却ノ為メ本月二十日以後入港船舶ヨリ左ノ通燈費取立ベキ旨右縣廳ヨリ通知有之候條此旨告示候事
　明治十七年四月九日　東京府知事芳川顯正
一積石五十石未滿　一艘ニ付　金十五錢
一同五十石以上百石未滿　同　金二十錢
一同百石以上　同　金廿五錢
但漁船ハ此例ニアラス

敍任

○明治十七年三月十三日
任農商務權少技長　農商務一等技手　森　明善
○明治十七年四月八日
任領事　大藏省權大書記官正六位　藤島正健
任內豎　冷泉孝麿
仝　壬生鯉之助
仝　慈光寺藤若
仝　大原　脩
敍正六位
從六位　松田金次郎

時事新報

佛人サルタレル氏ノ寄簡

去月廿五日發兌ノ時事新報雜報欄內ニ南米伯拉西(ブラジル)在留ノ佛國人サルタレル氏ヨリ地學協會ニ寄セタル書簡ヲ掲載ス其主意ノ大畧ハ今回伯拉西政府ニ於テ大ニ外國人民ノ移住ヲ奬勵シ移住スル者ニハ相當ノ保護ヲ與ヘテ丁寧ニ取扱フノミナラズ渡航ノ旅費ヲモ給與ス可キ筈ニ付日本ヨリモ移民ヲ送リテハ如何ト云フニ在リ此書簡ハ固ヨリ一個人ノ間ノ私牘ナレバ未ダ以テ伯拉西政府ノ企圖ヲ確知スルヿ能ハズ又此書簡ノミニテハ實地詳細ノ手續ヲモ知ルニ由ナシト雖モ該政府ガ移民ヲ勸誘スルハ今日ニ始マルニ非ザルヲ以テ此度ノ報道モ頗ル信憑ス可キモノアルガ如シ伯拉西ハ南亞米利加ノ一大帝國ニシテ二百七十万英方里ノ疆域ト一千万餘ノ人口トヲ有シ其地味ハ極テ肥沃ニシテ萬種ノ天產物ニ富饒ナルハ世人ノ普ク知ル所ナリ唯其位置熱帶地方ニ在ルヲ以テ我日本ノ如キ溫帶平和ノ國土ヨリ移住セバ氣候ノ激變ノ為ニ一時疾疫死亡ノ禍ニ罹ル者多カル可シトノ說アレ𪜈是迚モ身体强壯ナル者ニ取リテハ左マデ恐ル可キ事ニアラザル可シ特ニサルタレル氏ノ言ニ據レバ移住者ハ同國ノ首府ナルリオ、デ、ジヤネロノ近傍ニ居住セシム可シト云ヘリリオ、デ、ジヤネロハ同國ノ南端南緯二十度以南ニ在リテ同國ニ於テハ最モ炎暑ニ遠カリタルノミナラズ其位置ハ南米第一ノ海港タル海岸ニシテ常ニ大西洋ノ海風ヲ受タルヲ以テ同一ノ緯度ニ位スル自他ノ國々ヨリモ頗ル清冷ノ氣候ニ富メリト云ヘバ氣候ノ一事ハ思ノ外ニ心配ナキヿナラン、サレバ我國人ニシテ苟モ遠大ノ希望ヲ抱キ目前ノ艱苦ヲ辭セザルノ覺悟アル者ハ宜ク早ク志ヲ決シテ彼國ニ行キ日夜勉强シテ相應ノ富ヲ成シ他日功名ト富貴トヲ携載シテ本國ニ榮歸スルノ計ヲ為ス可シ即チ今ノ治世ノ男子ニ相當ノ事業ナラン、我輩ガ屢々論スル如ク我國今日ノ狀況ハ內ニ興ス可キノ事業アリ及之ヲ興ス可キ努力アリト雖𪜈此努力ヲ用ヰテ事業ヲ興ス可キ資本ニ乏シキガ為ニ百事不活潑ニシテ智アル者モ力アル者モ皆其智力ヲ殖產ノ道ニ用ヰルヿ能ハズシテ全國ノ人物ハ官途ノ一点ニ爭奪シ需要供給ノ不平均ヨリ人物ノ價値頓ニ下落シ有為ノ士空シク窮途ニ彷徨シテ不遇ノ嘆ヲ發スルノ有樣ナレバ此時ニ方リ國內ニ於テ徒ニ他人ノ足跡ヲ踏ミ錙銖ノ利ヲ爭ハンヨリハ寧ロ海外ニ雄飛シテ一攫萬金ノ策ヲ運ラスコソ大丈夫ノ所行ナレ殊邦絕域天涯萬里抔トハ鎖國時代ノ妄想ノミ蒸氣電信ノ今日ニ在テハ五洲萬國何ノ地カ比隣ナラザラン文明世界ニハ地理上ノ遠近ナキ者ト知ル可シ

右ハ今日我國ノ志士ノ為ニ謀リテ伯拉西ニ移住スルノ利益ヲ示シタルモノナレ𪜈又一方ヨリ伯拉西政府ノ為ニ考フルモ外國ヨリ移民ヲ輸入スレハ其國ニ取リテ大ニ利益アルヲ見ル可シ元來一人ノ男子ヲ生育スルガ為ニ要スル所ノ勤勞ト費用トハ決シテ僅小ナル者ニ非ズ子生レテ三年父母ノ懷ヲ免ル、ヨリ其子ガ丁年ニ達シテ一人前ノ働ヲ為スニ至ル迄衣食教育ノ入費ヨリ監視保護ノ勤勞ヲ金額ニ積リタラバ存外ノ巨額ニ上ランヿ明ナリ單ニ此計算ノミニテモ一國內ニ百人ノ丁年ニ達シタル男子ヲ得ンガ為ニハ幾十萬圓ヲ費サヾルヲ得ザル譯ナレ𪜈實際ノ費用ハ決シテ此ニ止マラズ其故ハ出生ノ男子ハ盡ク無難ニテ丁年マデ生長スル者ニ非ズ其間ニハ疾病災難等種々ノ原因ヨリ未ダ丁年ニ達セズシテ死亡スル者甚ダ多シ特ニ死亡ノ割合ハ壯年ノ人ニ少クシテ幼少ノ者ニ多キハ統計上ニ明証アル事實ナレハ實際百人ノ壯丁ヲ得ルマデニハ少クモ其三分一多クハ其半數以上ノ死亡アリト見做サヾル可ラズ又丁年前ニ死亡ヲ免カレタル者ト雖𪜈不具癈疾等ニテ終身作業ニ堪エザル者モ少ナカラザル可シ即チ此死兒ト無用ノ兒トヲ養育スルガ為ニ費シタル勤勞ト入費トハ空シク報酬ナクシテ消耗シ去リタル者ナリ抑育子ノ為ニ費ス所ノ勤勞ト入費トハ人々ノ勝手ニテ費消スル者ナレバ他人ノ為ニハ損害ナキガ如クナレ𪜈一國ノ公資ヲ減スルノ点ヨリ見レバ全体ノ結果ニ至リテハ正シク各自ノ嚢裡ヨリ若干ノ金銀ヲ取去ラレタルト同一ナル損害ヲ被ラザルヲ得ズ仮リニ此勤勞ト財本トヲ育子ノヿニ用ヰズシテ殖產興業ノ途ニ向ケタリト想像セバ直チニ一國ノ產物ハ非常ノ增加アルヲ想ヒ見ル可シ育子ノ為ニ一國ノ繁昌ヲ妨害スルヿ極テ大ナリト謂フ可シ

育子ノ為ニ莫大ノ勞費ヲ要シ隨テ一國ノ繁昌ヲ害スルヿ前述ノ如シトスレバ今外國ヨリ倔强ノ壯丁ヲ輸入スルハ恰モ種子ヲ播カズシテ秋收ヲ得ルニ均シク其國ノ利益タルヿ論ヲ俟タズ人間ノ壽命ヲ七十歲トスルモ充分一人並ノ働ヲ為スハ廿歲ヨリ五十歲迄ノ間ニシテ前後四十年間ハ概ネ一人前ノ勤勞ニ堪エズ半ハ他人ノ扶持ヲ仰テ生活スルモノナレバ國內ニテ一人ノ有用ナル男子ヲ作リ出サント欲セバ四十年間即チ其生涯ノ三分ノ二丈ケハ徒ニ無用ノ男子ヲ扶持セザル可ラザル譯ナルニ外國ヨリ壯丁ノ男子ヲ輸入スル𪜈ハ正シク其三分一丈ケハ厄介扶持ノ損失ヲ減省スルモノナリ然ノミナラズ外國ヨリ移住スル人民ハ概シテ身体强壯、氣力活潑ニシテ本國ニ在リテモ中等以上ノ人種ニ屬スル輩ナレバ同一ノ人數ニテモ國內ニ生レタル人民ヨリハ優等ノ人物ナランヿ疑ナシ此等ノ事ヲモ勘定ニ入ル、𪜈ハ彼此ノ利益ハ甚ダ廣大ナルヿナラン去レバ伯拉西政府ガ移民ヲ招來スルガ為ニ渡航ノ旅費ヲ給シ或ハ之ニ家屋ヲ與フル等ニテ一人ニ付若干ノ金ヲ費スハ決シテ其國ヲ誤リタル處置ト謂フ可ラズ世人或ハ伯拉西政府ガ移民ノ為ニ巨額ノ金ヲ費スヲ視テ窃ニ其不利ヲ疑フモノ無キニ非ザレ𪜈前述ノ理由ヲ了解セバ直ニ懷ニ釋然タル所アランノミ

電報

○三月十七日龍動發　東京の佛軍二隊は郎松の進撃を始めたり然るに佛國の諸新聞は之を可とせり

○三月十八日龍動發　佛軍は支那の正軍に追躡して散々にこれを打破り悉くその武器彈藥軍旗を奪取りたり

○三月十九日龍動發　佛軍は支那軍を狙擊することを止めたり

○三月二十五日龍動發　英國議院は撰擧權改革議案の討議を始めたるにヂヨン、マンナアス侯は討議を次の週間まで延はすの議を提出し可否二說に分れしが遂に侯の建議に決したり

○三月二十六日龍動發　スアキム府より達したる最後の報道に由るに英兵は全軍を擧けてナイル河上のタマニーに向て總進擊を始めたり是れ間諜者の報道にてオスマン、ヂグマがタマニーに屯せるを知りたるに由るなり

○三月二十七日龍動發　英軍先鋒よりの報道に由るに英兵は激暑の為に進む難くスアキムとタマニーとの途中に駐軍せり且つ軍中四百の兵士も疲困して戰ふ能はず又斥候騎兵は敵兵と小戰を為したり

○三月二十八日龍動發　最後の報に曰くオスマン、ヂグマはタマニーの市府を燒払ひたり又ヂグマはその從兵を率ゐて山中に逃去れり○英軍は正に兵を班へせり且つ英國及び埃及に向けて夫々歸陣すべし

○三月二十九日龍動發　當府に達したる報に曰くレオポルド親王は金曜日の朝(三月二十八日)佛國のカンに於て薨去せり侯は薨去の前日を以てノウチカル、クラツブに集會に臨みしに突然仆れたり侯の薨去は中風症なりし由なり

○四月六日龍動發　英國ケンブリツヂ、オキスホルド兩大學校の端舟競漕にてはケンブリツヂ方容易に勝を獲たり

○四月七日龍動發　佛國の兵隊はフホン、ホアに進擊を始めたるが敵軍は意を決して之を抗拒するならんと思はる

雜報

○音樂會　伏見貞愛親王には一昨日午后一時より麴町紀尾井町の御邸へ各皇族の御息所幷に三條相國の令閨井上參議の令嬢其他の方々を

○巡視　山縣內務卿
杉戶近傍の巡視よ

○饗筵　西鄉參議
ンケツト氏を始め

○榎本公使
及宝田書記官同伴
て歸京せり

○皇太后宮大夫
が杉宮內大輔が不

○岩佐一等侍醫
歐洲へ赴くといふ

○北垣京都府知事
官一名を隨へ昨朝

○武官免補　近衛
名ハ去る七日各左
免本職補名古屋鎮　近衛會計
會計一等
東京砲兵工廠巡
仰付候事　名古屋鎮
免本職補會計局
軍馬局病馬廠巡
會計局出仕及工
免候事
補會計局糧食課　會計局
免本職補東京鎮
東京鎮臺會計部
免本職補大阪鎮
大阪鎮臺會計部
免本職補東京砲
參謀本部會計部
免本職補近衛會
軍醫本部會計部
免本職補參謀本部

○兵庫造船局長　兵
長松田金次郎氏は
付工部大書記官用
務を命せられ同所へ
谷川嘉道氏へ用度

○出阪幷歸阪　砲兵
大坂砲兵工廠へ出張
せし大坂砲兵工廠
昨日東京出發歸坂

○軍法會議主理　海
海鎮守府軍法會議

○警視拝行　二等
成孝の三氏ハ孰れも